

首都大学東京 FD の現状と課題

FD 活動の新たな展開

首都大学東京 大学教育センター長・FD 委員会委員長



山下 英明 Hideaki Yamashita

首都大学東京では、開学当初より全学の FD 委員会を設置し、授業の方法をはじめとした教育活動の改善を図るため、全学的に様々な活動を行ってきました。本稿では、本学のこれまでの FD 活動を踏まえ、今後の教育活動の更なる改善のための課題について、筆者の考えを述べたいと思います。

1. 授業改善アンケート

首都大学東京では、開学以来、全学共通科目のほぼすべての授業で「授業評価アンケート」を実施し、その結果を授業担当者にフィードバックすることで、より質の高い授業の提供を目指してきました。しかし、質問項目の評点は、毎年異なる学生によって付けられることもあり、その数値の経年変化はあまり役に立たず、むしろ学生一人ひとりの意見の方が授業改善の参考になるとの教員の意見も多くありました。そこで、昨年度より授業アンケートの質問項目を授業改善に役立つよう大幅に変更し、アンケートの名称も「授業評価アンケート」から「授業改善アンケート」に改めました。アンケートによって授業の良し悪しを評価するよりも、むしろ受講者の具体的な意見、要望を集め、これを基に授業を改善し、それを学生に示す仕組みを作る方が効果的であると考えたからです。

具体的には、8問あった全科目共通の選択式の質問項目を、シラバスの有用性、授業時間外学習時間、授業の理解度、修得できた知識・能力の4問に限定し、代わりに受講者が記述式質問の回答に時間を割けるようにしました。記述式の質問は、「教員の工夫等授業の良かった点」、「改善してほしい点、可能ならば具体的な改善案」、「授業やカリキュラム全体および授業設備についての自由意見」の3項目とし、受講者から様々な具体的な意見、要望を集められるよう工夫していま

す。この結果、平成26年度前期における回答者1人あたりの記述式質問の回答数は1.49となり、従来の自由記述の回答の約3倍に増加しました。このアンケートで得られた授業に対する学生の具体的な意見・要望は、教員が授業内容・方法を改善するうえで非常に有益な情報を含んでいます。各教員が自分の授業に対する意見をどのように授業改善に結びつけるかが重要であることは言うまでもありませんが、それと同時に、すべての学生の意見を FD 委員会が分析し、多くの授業に共通する学生の感想や意見を踏まえ、教員が取り組むべき共通の課題を明らかにしていくことも、今後の課題であると考えています。

一方、授業担当者に対するアンケートでは、選択式の質問をなくし、「学生の要望を参考にして授業で変更した点」、「変更した点による授業改善の効果」、「学生の要望は理解しているが授業で変更しなかった点で、その理由を授業で学生に説明したもの」について記述していただくことにしました。受講者の意見・要望について教育効果を考慮し、改善すべきところは改善し、次年度の受講者に説明する。従来通り行うべきところは、変更しない理由を受講者に説明する。このような担当者の誠実な対応によって、担当者と受講者の間の信頼関係に繋がると考えたからです。

また、授業担当者のアンケートの回答は、本人の同意を得たうえで、学内で情報共有することになっています。しかし、教員がすべての授業の記述を読むのは大変なので、基礎ゼミ、情報リテラシー等、科目群ごとに分類するのはもちろん、シラバス、授業での説明方法（スライド、黒板の使用法）、授業時間外学習等、記述内容のトピック別に分類したり、キーワード検索機能を付加したりして、教員がいつでも辞書的に活用でき、他の授業から授業改善のヒントを得られるよう

にしたいと考えています。

2. 研修・セミナー

首都大学東京では、教育改革における主要なテーマや授業方法についての研修を目的としたFDセミナーを毎年開催し、FDの専門家の講演や本学教員の授業方法に関する情報提供をお願いしています。また、新任教員を対象とした研修や、教員と職員が合同で大学教育について考えるFD・SDセミナー等も実施し、研修とともに懇親の機会にもなっています。

ここ数年のFDセミナーでは、溝上慎一氏（京都大学）による「「知」にこだわった大学のアクティブラーニング型授業」、鈴木克明氏（熊本大学）による「インスタラクショナルデザインに基づいた授業デザインの方策」、杉原真晃氏（山形大学）による「授業時間内外での能動的学習をいかに支援するか」など、教員が能動的学習型授業を設計するうえで参考となるご講演を伺いました。また、本学の教員の方々には、知識伝達型授業において能動的学習を実践された事例をご報告いただくなど、FDセミナーを教員相互の情報交換の場としても活用しています。しかし、現状では教員のFD

セミナーへの参加率は低く、授業改善を支援する活動として十分機能しているとは言えません。この理由としては、教員に他の授業を閲覧したり参考にしたりする文化が根付いていないことや、講演の内容がそのまま自分の授業改善に当てはまるわけではないことなどが挙げられます。FD活動は本来、教員同士がお互いの授業を評価したり、参考にしたりして、お互いの授業を改善していく場であるべきです。例えば、教員が自分の授業の悩みや課題を持ち寄り、それを共有して解決策を見出していくような、全員参加型の取り組みができれば、FD活動がより授業改善に資するのではないかと考えています。

本学でFD活動が始まってちょうど10年が経過しようとしています。この間、FDはアンケートやセミナーを通して全学に浸透し、教育改善の機運は少なからず高まっていると感じています。我々は、これを機にもう一度FD活動を本来の目的に立ち戻って見直し、少しでも多くの教員が“能動的に”参加し、協働できる活動を展開していくことが求められています。

FD News

「能動的な学習を促すために —手法の提案と事例の紹介—」を 発行しました！

この小冊子は、授業の中でも特に講義において、能動的な学習（アクティブ・ラーニング）を取り入れるためのヒントを提供することを目的に作成しました。

具体的には、

- ◆ 授業時間の内外で実践できる
 ティップス（ヒント）
- ◆ 本学教員の取組事例

を紹介しています。

首都大学東京FDウェブサイト
(<http://www.comp.tmu.ac.jp/FD/>)でも
公開していますので、ぜひ参考にさせていただければ幸いです。

